

イギリスにおけるゲルツェンとオガリョーフ

——イギリスにおけるその研究者たち、資料、旧居についての
調査報告——

今 井 義 夫

目 次

はじめに

- I. イギリスのゲルツェン、オガリョーフ研究者たち。
- II. イギリスの図書館におけるゲルツェン、オガリョーフ関係資料。
- III. ゲルツェンのロンドンにおける旧住所とオーセット・ハウスの現状。
- IV. オガリョーフのグリニッジの旧居と遺骨のモスクワ移転（1966年3月）について。

あとがき

A. Herzen & N. Ogarev in England

Yoshio IMAI

CONTENTS

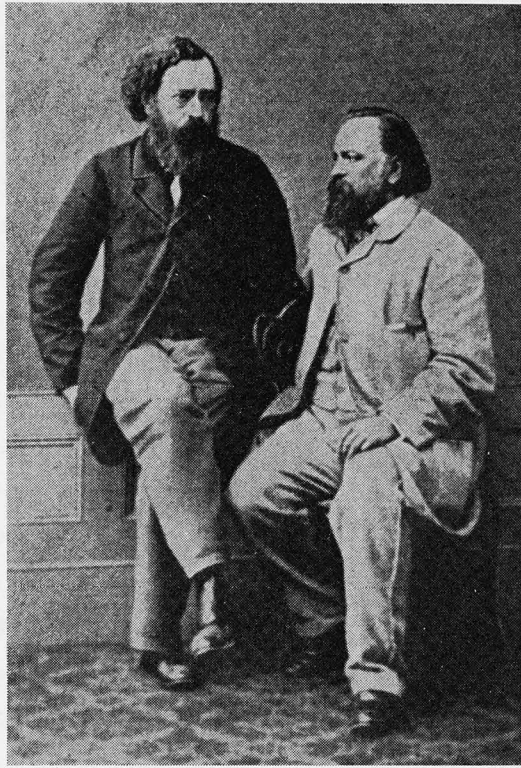
Preface

- I. British scholars and their studies about Herzen and Ogarev.
- II. Documents and books on Herzen and Ogarev in England.
- III. Herzen's residences in London and his Orsett House.
- IV. Ogarev's residence in Greenwich and the return of his ashes to Moscow in March 1966.

Conclusion

Two Russian political thinkers, A. Herzen and N. Ogarev, emigrated to England in the mid-nineteenth century. They founded in London their Free Russian Press whose publications were devoted to propagate for the emancipation of Russian serfs. Herzen left England in 1865 after spending twelve years in London and Ogarev died at Greenwich in 1877.

The author during his studies at Oxford (1968—1970) traced their activities in England. He devotes chapter I of the paper to the British scholars who helped him in his work, and their studies in this field. In chapter II, he reports on his bibliographic surveys of the documents and the books on Herzen and Ogarev found in libraries in England. The present condition of Herzen's former residence in London and that of Ogarev's at Greenwich are viewed respectively in chapters III and IV. And, lastly, an episode about the return of Ogarev's ashes from Greenwich to Moscow in 1966 is recounted with reference made to the articles in the concerned Soviet journals.



(No. 1) ロンドンにおけるゲルツェン(右)とオガリョーフ(左).

Herzen & Ogarev in London, 1860.

は じ め に

この報告は1968年秋から1970年秋にかけての筆者の二年余のイギリス留学期間中に、専攻テーマの一つとしていたロシアの亡命思想家アレクサンドル・イヴァノヴィチ・ゲルツェン (Александр Иванович Герцен, 1812~1870) とその僚友、ニコライ・プラトノヴィチ・オガリョーフ (Николай Платонович Огарев, 1813~1877) をめぐるイギリスでの調査報告である。このテーマに関連して、筆者にはすでに1969年9月にイギリスで発表し、後に本紀要第8号に掲載した“The London Meeting of Herzen and Chernyshevsky in June 1859” があるが、今回の報告もまた、イギリスにおけるこれらのロシアの亡命思想家たちをめぐる調査の一部として、ここに報告することにした。

ゲルツェンとオガリョーフがイギリス亡命中にロンドンに設立した『自由ロシア出版所』の活動がロシアの解放運動史のなかで画期的な事件であったことはよく知られている。筆者は常々彼らの活動の舞台となった現地イギリスを訪れて、そこに保存されている資料や旧居に接したいという希望を抱いていた。また留学の主要な目的の一つはイギリスの大学で学び、その学風に接して、その研究者たちと交流したいということであった。国際的なテーマについての研究にたずさわるものにとって、外国の専門家たちの労作に学ぶことは当然なことであるが、その研究方法や資料発見について直接教示を受けることは一層有益であろう。

そのような意味で、今回の報告は、I.として筆者自身がイギリスにおいて直接教示を受けた諸学者のうち、とくにゲルツェン、オガリョーフに関する研究上の教示をうけた人々について報告することにした。これらの学究は、いずれもイギリスにおけるロシア思想史の第一人者たちであったから、報告のこの部分はこの領域でのイギリスの学界状況についての報告を兼ねることになろう。II.としてはゲルツェン、オガリョーフに関する文献のオクスフォード大学やロンドンの大英博物館（British Museum, 以下BMと略称）、ケイムブリッジ大学の中央図書館などでの調査報告。III.はロンドンのゲルツェンの旧住居の一つオーセット・ハウスについての調査報告。VI.としてオガリョーフの最後の住居となったグリニッジの旧住所の現状と、1966年に行われた遺体のモスクワ移転に関する記事についての紹介を試みる。

I. イギリスのゲルツェン、オガリョーフ研究者たち

イギリスの学者たちは概して広い教養と研究領域をもっているから、この章の標題にかかげたような限定された特殊なテーマの専門家の名をあげるのは容易ではない。しかし、私自身がそのようなテーマで助言者を求めた時にイギリスでは次のような人々が私の希望にこたえてくれた。

オクスフォード大学の社会思想研究家として国際的に知名なアイザiah・バーリン教授（Sir Isaiah Berlin）は、日本でもすでにその論文集 *Four Essays on Liberty*（1969）が『自由論』として翻訳されているし、モーゼス・ヘスについての小論やカール・マルクスの伝記の著者としても知られている。同大学では故G.D.H. コール教授の後を継いで社会・政治理論講座を担当し、その学識の広さと、ユニークな歴史哲学で知られ、今日なお、オクスフォードにおける思想史研究の重鎮である。しかし、

同教授のもっとも得意とする領域はロシア社会思想史であって、これに関連する論文や著書も少なくない。そのうちの二・三は今日イギリスにおけるロシア思想史の学徒がまず読まねばならない基本文献とさえいわれている。以下にそのリストを掲げよう。

“Russia and 1848” 1948.

The Hedgehog and the Fox, 1953.

“Herzen and Bakunin on Individual Liberty”, 1955.

“A Marvellous Decade”, 1955.

Introduction to the English translation of *From the Other Shore and the Russian People and Socialism*, 1956.

“Tolstoy and the Enlightenment”, 1960.

Introduction to *Russian Intellectual History, an Anthology*, by M. Raeff, 1966.

上掲のリストからうかがえるようにバーリン教授の関心はとりわけロシア・インテリゲンツィア論にあり、そのうちでもゲルツェン、ベリンスキー、バクーニンなど19世紀の思想家たちについてはとくに造けいが深い。

西欧自由主義の伝統を身上とする同教授の視点はこれらのロシアの急進的思想家たちをも個人の自由の追求者としてとらえ、彼らのなかにある自由な精神の躍動を評価しようとする。そのような傾向はこれらの思想家たちをロシアにおける唯物論思想や社会主義思想の先駆者として評価する今日のソ連の学界でのオーソドックスな解釈とはむしろ対立的でさえある。それは同じ研究領域においても、もう一方の重鎮であるケイムブリッジ大学の E. H. カー教授の関心やその傾向とも相容れぬものをもっている。バーリン教授の講演『歴史的必然性』における歴史的必然性の理解をめぐる両教授の間に交された論争の内容はすでに日本にも紹介されているが、そこに二人の歴史哲学の相違の一端が示されている²⁾。

私の在学中、バーリン教授が最初の、専門テーマの指導教授に指名された。しかし、当時同教授はウルフスン・カレッジの学長としてその新設校舎の建設事業のために多忙でなかなか面接の機会を得なかった。ようやく同教授との対話の機会を得た時の話題は、1861年の農奴解放前夜のゲルツェンとチェルヌィシエフスキーの政治的見解の対立をめぐる問題であった。同教授はこの両者の対立で、ゲルツェンの自由主義的立場に極めて同情的であり、チェルヌィシエフスキーの代表する革命的政治路線には非同情的であった。私としては、ゲルツェンとチェルヌィシエフスキーの対立が単

なる世代感情の相違や戦術上の意見の対立ばかりではなく、両者の思想傾向そのものに根ざしていると考えた同教授の意見は参考になった。

独特の早口の英語で教授はその該博な知識を披露されたが、そのうちで興味深かったのはゲルツェンが1857年にドブローリューポフの急進的論調に警告して書いた批判的論文の標題を英語で“Very dangerous!!!”としたのは、当時のロンドンの新聞がヴィクトリア女王の夫君アルバート公の政治的冒険に対して放った諷刺漫画の標題をそのままとったものだという話であった。専制政治下のロシアから亡命してきたゲルツェンがイギリスにおける王室へのこのような世論の遠慮のない批判に感銘をうけたことはカー教授も指摘しているが、しかし、その標題がゲルツェンによってロシアの新しい世代の代表者であるチェルヌィシェフスキーやドブローリューポフに向けられたことにこの事件の悲劇性があった。

バーリン教授への献辞をかかげてオクスフォード大学出版局から出版されたラムパート博士 (Dr. E. Lampert) の *The Study on Rebellion* (1958年) におけるゲルツェンやベリンスキーの扱いのなかには、その手堅い実証的作業と著者の革命思想への同情が結びついていて、バーリン教授に代表されるオクスフォードのやや保守的な解釈とは異なる独自のゲルツェン像を示している。同じ著者による第二作、*Sons Against Fathers, Studies in Russian Radicalism and Revolution*, 1965, にはそのような著者のロシアにおける革命的な民主主義思想への積極的評価がいっそう明瞭にうかがえる。

ラムパート博士は新設のキール大学 (University of Keele) のロシア科の主任教授として、同大学の若手ロシア史講師パートレット氏 (Mr. R. Bartlett) らとともにロシア史の講義を担当している。たまたまその私宅がオクスフォードにあったので私は度々そこを訪れて研究上の助言を得ることができた。同教授はその著書が西側の批評家からはロシアへの西欧思想の影響を軽視していると批判され、ソ連の批評家からはマックス・ウェーバー的偏向を指摘されたと苦笑しておられた。

あまりにも多忙なバーリン教授に代って、私の指導教授として指名されたのはセント・アントニーズ・カレッジのロシア・センターにいるハリー・ウィレッツ氏 (Mr. Harry Willetts) であった³⁾。同氏はゲルツェンやチェルヌィシェフスキーについての研究上の特別な労作はないが、オクスフォード大学の一般講義でロシア近世史を講ずるかたわら、ポーランド史の研究にたずさわっており、同大学の歴史叢書のポーラ

ソド史の執筆が予定されている。その意味では、ポーランドの政治運動とかかわりの深かったゲルツェンについては独自の関心をもっている。

ウィレッツ氏のロシア史講義は1969年の10月の学期から1970年の三学期にわたった（イギリスの大学は年三学期制）。第二学期の講義ではデカブリストからナロードニキにいたる解放運動史をふくみ、概論ではあったが、同氏のすぐれた見識を示していた。同氏のゲルツェン、オガリョーフについての理解は、両者の政治的性格についてもそれぞれの個性を重視して、違ったタイプの革命思想家であることを強調している点が印象的であった。なお、同氏にはレーニンと農業問題に関する論文もある。

第二年次になって指導教授はウィレッツ氏からチンメン・アブラムスキー氏（Mr. Chinmen Abramsky）に代った。同氏はもともとマルクスやイギリス労働運動史の研究家で、故・ヘンリー・コリンズ氏との *Karl Marx and the British Labour Movement*, (1965) の共著者として知られている。同氏はまた、ロシア革命をめぐる思想史に詳しく、セント・アントニーズ・カレッジのロシア・センターの講師としてプレハーノフ、ブハーリン、トロツキー、レーニンなどについて連続講義を担当したことがあった。これらの領域での同氏の卓越した知識は疑うべくもなく、またその個人蔵書の豊かさと文献上の知識については定評があった。しかし、ゲルツェンやチェルヌィシェフスキーについての具体的な知識に関しては、前記の助言者たちにくらべて同氏は必ずしも専門研究者とは言えないように思われた。

ゲルツェン、オガリョーフの研究について、イギリスにおける草分けともいえるべき老大家はケイムブリッジ大学の E. H. カー教授（Professor E. H. Carr）である。その労作『浪漫的亡命者』（*The Romantic Exiles*）, (1933年）は同じ著者による『ドストエフスキー伝』（1931年）、『バクーニン伝』（1937年）などとともにすでに古典的な存在であり、いずれもその邦訳もあってわが国の読者にも親しまれている。そのうち『浪漫的亡命者』はゲルツェンとオガリョーフを扱ったもので、そこにはイギリスの歴史研究のなかで伝統的主流をなしている伝記的手法でこの二人のロシア人亡命家たちとそれを取りまく家族、友人などの公私両面の複雑なかつとうと波乱に満ちた生活がドラマチックに描き出されている。それは豊富な資料と外交官らしい冷静かつ細微な観察に裏づけられたすぐれた歴史的研究であるとともに、文学的にもすぐれた作品といえるのである。この作品に描かれた亡命ロシア人思想家群像はロンドンやグリニッジのゲルツェン、オガリョーフの旧居を訪れた時に私のなかにいっそう強烈によ

みがえった。

ケイムブリッジ大学のトリニティ・カレッジに研究室をもっているおそのライフ・ワークというべきソビエト史の完成に努めている同教授を訪れると、教授はたまたまロンドンの大英博物館（BM）から帰ったところで、BM にはゲルツェン研究に関する貴重な資料があると語っておられた。同教授には、そのほかゲルツェンについて“Herzen: An Intellectual Revolutionary”（1947）、チェルヌイシェフスキーについてはその作品『何をなすべきか』の英訳に付した序文（1964年、その後 *1917 Before and After*, 1969 に再録）がある。



(No.2) ノッティンガム大学の研究室でのパートリッジ教授。筆者撮影。

Prof. M. Partridge in her Study of the University of Nottingham, 1970.

イギリスにおけるゲルツェン、オガリョーフ研究家として知られているのはノッティンガム大学のスラブ研究部門の主任教授であるモニカ・パートリッジ女史（Dr. Monica Partridge）である。同教授はゲルツェン研究によってロンドン大学で学位を得たいわばゲルツェン専門家であるが、イギリス国内で発表活動をしているだけでなく、ソ連の雑誌や研究書にも寄稿していて、ソ連学界との交流にも熱心な人である。同教授の今までの発表したゲルツェン関係の論文をあげると次のとおりであるが、そ

のうちでもゲルツェンとイギリスとのつながりをしらべた研究はユニークな労作であり、一部はロシア語でソ連においても発表されている。

“Alexander Herzen and English Press”, 1958.

“Alexander Herzen and the Younger Joseph Cowen, M.P., Some Unpublished Material”, 1962.

“Александр Герцен и его Английские Связи”, 1963.

“Herzen’s Changing Concept of Reality and its Reflection in his Literary Works”, 1968.

私は1970年夏にノッティンガム大学の同教授を訪れて研究上の助言を乞うたが、同教授はゲルツェンの伝記の執筆中で、その完成は間もないとのことであった。同教授からは上掲の論文のコピーをいただいたほか、イギリスにおけるゲルツェン研究の現状やオガリョーフの遺骨のモスクワ帰還（本稿第四章参照）などについて聞くことができた。

[I. 注]

- 1) バーリン教授の著作は比較的少いが、オクスフォードでもその名講演で知られ、印刷にされていない発表・報告などはかなりあるはずである。たとえば1969～1970年の間でも同大学のロシア・クラブでの講演やシェルドニアン講堂における記念講演——ペリンスキーの美学理論について——などは多くの聴講者が来聴した。

- 2) 同教授の講演 “Historical Inevitability” (1954年) は生松敬三氏の訳で1966年にみすず書房から出版されたが、その後、ふたたび同氏の訳で『自由論』(1971年、みすず書房)のなかに収録されている。同書「序論」および、E. H. カー『歴史とは何か』参照。

バーリン教授とカー教授のしんらつな相互批判にもかかわらず、この両大家が個人的には親しい間柄であるという話を現地で聞くことができて、イギリスの学者のよい一面を見る思いがした。

- 3) Russian Centre of St. Antony’s College, Oxford セント・アントニーズ・カレッジのロシア・センターはオクスフォード大学におけるロシア、ソビエト、東欧研究の中心的機関である。私の在学当時のスタッフは次のとおり。

ロシア革命史を中心とする政治史。

カトコフ (Dr. V. Katkov), シュックマン (Dr. H. Shukman),

ロシア史およびポーランド史、ウィレット (Mr. H.T. Willets)

コミンテルン史およびソ連史、キンダズリー (Dr. R.K. Kindersley)

ソビエト文学史、ヘイワード (Mr. H.M. Hayward)

ロシア文学史、ヒングリー (Dr. R.F. Hingley)

東欧・ソ連経済、ケイザ (Mr. M.C. Kaser)

このセンターに影響力をもつ LSE のシャピロ教授 (Dr. L. Schapiro) はソ連党史の専

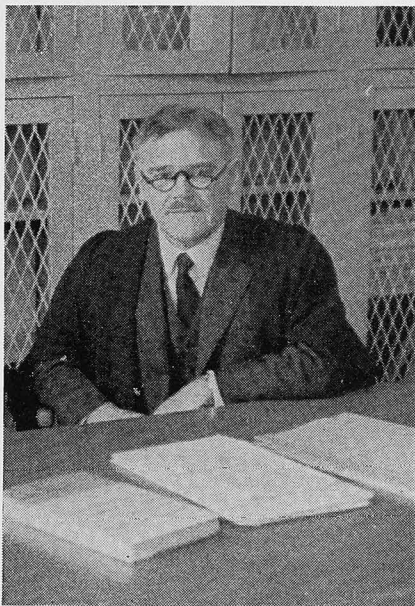
門家として知られているが19世紀ロシア社会思想史に関する著書もある。*Rationalism and Nationalism in Russian Nineteen-Century Political Thought*, 1967.

このセンターでは毎学期、ロシア、東欧関係の特殊テーマによるセミナーを開催し、毎回世界各国から専門研究者を招待して講義と討議が行われる。ロシア社会思想史に関しては、アメリカからエム・ラーエフ教授 Prof. M. Raeff やイタリアからエフ・ヴェントウーリ教授 Prof. F. Venturi その他が参加した。

Ⅱ. イギリスの図書館でのゲルツェン、オガリョーフ関係文献

在英中、私はロシア史関係の文献の所在とその利用については、当時オクスフォード大学のテイラー・インスティテューション (Taylor Institution, Oxford) のスラヴ

文献の責任者であったシモンズ氏 (Mr. J.S.G. Simmons) の指導とお世話をうけた。同氏は国際的なスラヴ文献学の権威で、オクスフォードのスラヴ研究誌 (“Oxford Slavonic Papers”) の編集をはじめ、自身の調査研究の発表の面でも活躍されている。現在はオールソウルズ・カレッジのフェローである。1968—1969年はオクスフォードを中心とするイギリスおよびヨーロッパ大陸におけるロシア文献関係の図書館、アルヒーフ、研究機関、およびビブリオグラフィーについての専門ゼミナールをもっておられたので、筆者は留学の第一年度にこれに参加させていただいた¹⁾。(写真 No. 3)



(No. 3)

Mr. J.S.G. Simmons のスラヴ文献のセミナー。Taylor Institution, Oxford, 1969.

私がゲルツェン、オガリョーフについての文献資料をしらべたのは主として、オクスフォード大学の各図書館、ロンドンの大英博物館 (BM)、ケイムブリッジ大学の中央図書館、ノッティンガム大学の図書館などであった。そのうちもっとも重要な

はBMであり、次いでオクスフォードの各図書館であった。

オクスフォードではスラヴ関係文献のセンターとしては上記のテイラー・インスティテューションのスラヴ部門ライブラリー、大学の中央図書館ボードリアン・ライブラリー、およびセント・アントニーズ・カレッジのロシア・センターのライブラリーの三つである。そのいずれにも最近のソ連で出版されたゲルツェン関係の全集、選集、研究書などは一通り揃っている。専門的な観点から私の関心をひいたものを二・三あげておこう。

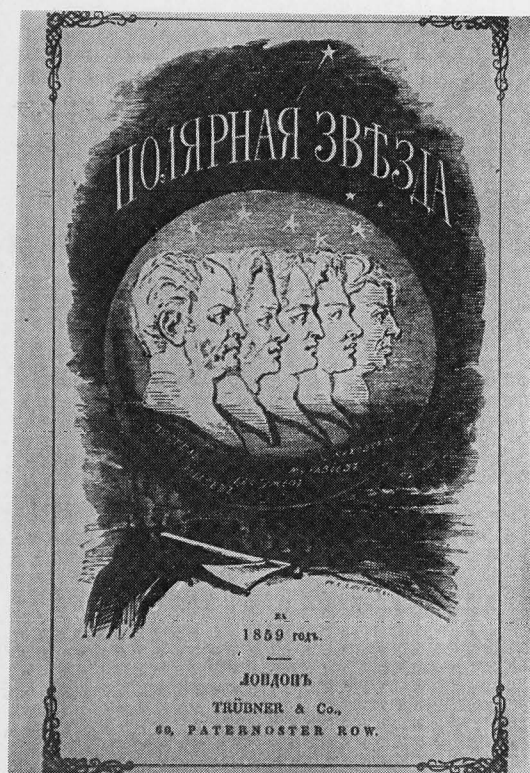
まず、セント・アントニーズカレッジのロシア・ライブラリーにあるレムケ版のゲルツェン全集は欠本もあったが研究上有益であった。この版の編者の註には戦後のソ連科学アカデミア版の全集にはない特色がある。その他付録のゲルツェンの年譜なども貴重な資料である。なおこの版の完全な揃いはオクスフォードではバーリン教授が個人としてもっているとのことであった。

ゲルツェンの回想録『過去と思索』は各種の版があるが、セント・アントニーズ・カレッジには1932年出版のカーメネフ編集の三巻本がある。カーメネフ (И.В. Каменев, 1883~1936) はスターリンとの対立によって1936年には粛正されたが、それ以前はレーニン研究所の初代所長も勤めた人物で、その編集して『過去と思索』の巻末の註には彼の貴重な解説を含んでいる。この種の文献の入手の困難さを前記のアブラムスキー氏は強調していた²⁾。おそらく、このライブラリーに来る前のソ連での旧所有者が官憲によるものであろう、三巻のいずれもが、その見開き頁にある編者カーメネフの名を切り取られていてこの書物の受難の歴史を示している。その他、このライブラリーにはゲルツェン関係のものとしては、彼の論敵であり、後にピーサレフによって政府の御用論客としての本性をあばかれて有名になったシェド・フェロッティ (D.K. Schédo-Ferroti) のゲルツェン誹謗のパンフレットなどが所蔵されている。

テイラー・インスティテューションにはチェルヌィシェフスキー、ドブロリューボフによる評論雑誌“ソヴレメンニク”の当時の版がかなり集められている。

ボードリアン・ライブラリーにはゲルツェンの数少ないイギリス人の友人で協力者の一人、ウィリアム・リントン (William Linton) の回想記をはじめ彼の著作・版画集などが保存されている。彼の版画がゲルツェンの『北極星』の表紙を飾っていることを知る人はまだ少いようである。(写真 No. 4)

ロシア関係の資料と文献の量と質においてイギリスにおける最も豊かな蔵書をもつ



(No. 4) ゲルツェンの『北極星』の表紙。
W. Linton のデザインによる。

のはロンドンのBMのライブラリーである。これは、かつて同ライブラリーの文書保存係であったトマス・ワット氏 (Mr. T. Watts, 1811—69) がロシア以外でもっとも充実したロシア関係のコレクションをここにつくろうと努力した結果であるという³⁾。

このゲルツェン関係のコレクションは160種をこえるがしかも重要なのは、そのなかにゲルツェンが1853年にロンドンに開設した『自由ロシア出版所』からの各種出版物はじめ、ロシア革命以前のゲルツェン関係の出版物を多数含んでいることである。おそらく、ワット氏の意図通り、この種のロシア文献に関してはここBMはたとえソ連の

コレクションには及ばぬにしても世界で最も豊かなコレクションの一つといえよう。しかしその整理・整本状態は必ずしも良好といえない。私は数日を要してそのカタログを筆写するとともにでき得る限りその実物に当たってみることにした。

このBMに収蔵されているゲルツェン関係の文献資料に関しては別に詳しい紹介の機会をもちたいと考えている。ここではその貴重書閲覧室ノース・ライブラリーで筆者が見ることのできた『自由ロシア出版所』の設立宣言のビラについてふれておこう。

この宣言文はゲルツェンが『ロンドンにおける自由ロシア出版所』という名称をはじめてかけ、「ロシアの兄弟たちへ」という見出しで1853年2月21日に発行した歴史的文書である。すでに、この宣言文自体はゲルツェンの全集や著作集に収録されていて周知のものであるが、BMに保存されているのはその最初のビラそのものである。

この宣言のビラはタテ23cm、ヨコ19.5cmの二枚の薄紙に美しい筆記体のロシア文

字で石版刷にされている。そのうち最初の一枚には表と裏の二面に印刷されていて、二枚目には表だけの印刷で終わっている。その用紙は最初の一枚の場合裏面の文字が表面にややすけて見えるほど薄く、かつ丈夫な紙質である。察するにこの用紙は困難なロシアの検門を経てロシア国内に秘かに持ち込むために工夫されたものであろう。実際のピラを手にしてあらためて当時のゲルツェンの政治活動の行われていた困難な状況を推察することができたのである。文面の呼びかけは彼がおかれていた時代の状況と亡命地ロンドンではじめてロシア語で出版活動を開始する彼の決意を物語っている。その最初の数節の拙訳をかかげて当時のゲルツェンの意図を示すことにしよう。

「ロシアの兄弟たちへ。

なぜわれわれは沈黙しているのか？

本当にわれわれには語ることがないのか？

それとも、われわれは語ることができないために沈黙しているのではないだろうか？

故国には自由なロシアの言葉の場所はないが、それは時が来れば鳴りひびくことができるのだ。

私は諸君にとってそのすべての感情、すべての思想、すべての衝動をおおいかくさねばならぬ沈黙というもののいかに苦しいものであるかを知っている。

公然たる、自由な言葉とは偉大な事業である。自由な言葉なしに——自由な人間はない。——そのためには人々は生命を捧げ、故国を捨て、財産を投げだしても無駄ではない。——ただ弱い者、怖れる者、未熟な者のみが己をかくしている。“沈黙は同意のしるしである”——沈黙は明らかに棄権と絶望と、逃げ道のないことを認めて頭を下げることをあらわしている。

公然たる言葉は儀式的な承認であり、行動への移行である。

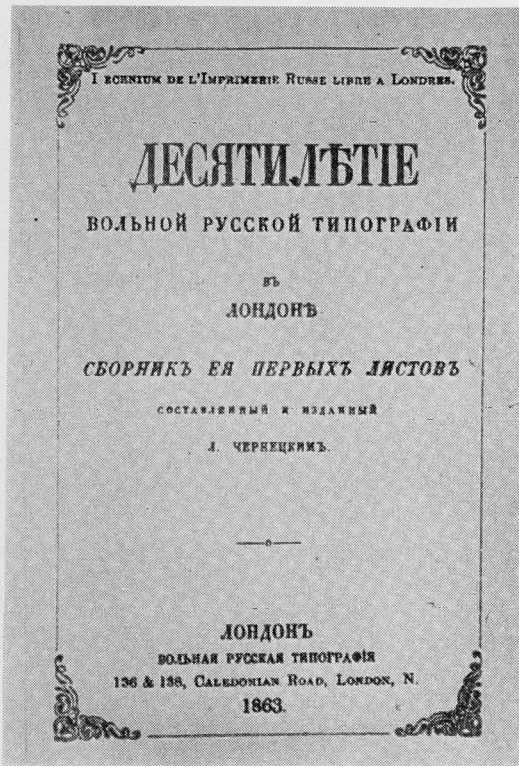
ロシアの外で、ロシア語によって印刷する時が到来したとわれわれには思われる。われわれが誤るかあるいは正しいかは諸君がそれを示すであろう。

わたしははじめて外国語の鎖から己を解き放して、あらためて故国の言葉にとりかかる。

.....

」

この宣言文は後半は「“われわれと諸君の自由のために”」という呼びかけの文章をかかげ、最後に「ロシアの政治的自由の名において」と結んでいる。



(No. 5) 『自由ロシア出版所の10年』の表紙。

ことができる。ここにはまたゲルツェンがロシア国内からの投書や通信を編集して専制と農奴制下のロシアの現実を暴露した文集『ロシアからの声』もロシアの専制支配の歴史の真相を明らかにすべくつくられた『歴史文集』、またこの出版所の10周年を記念して発行された『ロンドンにおける自由ロシア出版所の10年——その最初の文書集』と題する記念文集なども閲覧することができる(写真 No. 5)。フランス語や英語に訳されたゲルツェンの当時の著作も数多く収集されている。

カー教授がその *The Romantic Exiles* のなかで使ったドイツの詩人ヘルヴェークとゲルツェンの妻ナターリアの手紙をはじめゲルツェンとの交流のあった人々の私信などがこのBMのマニュスクリプトの部門に収蔵されているはずである。私は例のリントンの書簡などが見られないかと期待していたが、リントンの手稿資料はイタリアのフェルトリネッリのコレクションに一括して購入されてしまったはずだとアブラムスキー氏が教えてくれた。

一時、ゲルツェンの自由ロシア出版所のあったリージャントスクエアはこのBM

1847年ロシアの専制・農奴制体制から追われてあこがれの地ヨーロッパに亡命したゲルツェンは、そこで1848年の革命を経験して、その過程で西欧のブルジョア体制のもつ虚偽と危険性に幻滅してふたたびロシアに思いをめぐらし、専制と農奴制にたいするあらたな闘いを決意する。1853年にロンドンで発行されたこのロシア語による宣言はその記念すべき第一歩であった。

このBMのノース・ライブラリーではこの宣言につづいて発行されたゲルツェンによるロシアの貴族たちへの農奴解放の決意を呼びかけた“ユーリーの日、ユーリーの日、ロシアの貴族たちへ”と題する宣伝ビラも見る

から遠くない静かな通りに面した場所である。ラムパート教授の話では当時このゲルツェンの出版活動に関係したイギリスの出版社に取引上の書類などが保存されていないかを問い合わせたが当時の文書はすでに会社自身の手で処分されていて見る事ができなかったということであった。

ケイムブリッジ大学の中央図書館では18世紀のロシアで出版された雑誌類のマイクロフィルムの揃いなどめずらしいものがあったが、ゲルツェンに関しては一般的なものが多く、とりわけ貴重なものは見当らなかった。おそらくカー教授をはじめとするロシア史研究者の所属するカレッジのライブラリーなどに見るべきものがあると思われるが、私の調査はここではそこまで及び得なかった。

ノッティンガム大学の図書館もパートリッジ教授の好意で拝見したが、スラヴ部門の学部をもっているこの大学では地方大学とはいえかなり充実したロシア語文献を揃えていて感心した。しかし、ゲルツェン関係のめずらしい小コレクションはパートリッジ教授の個人的な蔵書が中心で、それらは同教授の研究室の前の廊下にガラス・ケースに収められて展示されていた。そこにはゲルツェンの自由ロシア出版所から出版された『鐘』や『北極星』などの数点のオリジナル・プリントが含まれていた。

〔II. 注〕

- 1) シモンズ氏のセミナーの正式名称およびテキスト代りに講義毎に配られた参考資料のタイトルは次の通り。

Mr. J.S.G. Simmons—Russian Bibliography and Oxford Library Resources, Taylorian.

“BOOKLISTS to accompany a course of lectures on RUSSIAN BIBLIOGRAPHY & OXFORD LIBRARY RESOURCES” by J.S.G. Simmons. Oxford, 1968~1969.

同氏にはイギリスにおけるスラヴ関係の学位論文の統計的研究その他がある。“Theses in Slavonic Studies “Approved for Higher Degrees by British Universities, 1907~1966”, *Oxford Slavonic Papers*, Vol. XIII, 1967.

- 2) А.И. Герцен, *Былое и Думы*, ред. Л.В. Каменев, АКАДЕМИА, 1932.

- 3) ВМ のロシア関係文献の蔵書についてはモスクワのレーニン図書館国際交換部長カネフスキー氏による“19世紀における大英博物館のロシア語文献”と題する論文がある。

Б.П. Каневский, “Русская книга в Британском музее в XIX века”, 1969.

Cf. P.J. Fairs, “Russian Publications in the British Museum in the Nineteen Century”はその内容紹介である。

Ⅲ. ゲルツェンのロンドンにおける旧住所とオー セット・ハウスの現状

亡命後のゲルツェンはフランス、スイス、イタリア、イギリスの各地を転々と移り住んだが、1851年に海難により母と次男を失い、さらに翌年1852年に妻のナターリアを失った後にフランスから一家をあげてロンドンに移り住んだ。はじめ、つかの間の滞在と考えていたイギリスにゲルツェンはもっとも長い12年間余を過すことになった。

ゲルツェンのイギリスにおける生活体験は彼の書簡のなかでもたどることができるが、その回想記『過去と思索』のなかの第六章“イギリス(1852—1864)”に彼のこの国での体験と考察が述べられている。彼はこの国の国民の小市民的性格について非難がましい批評を加えながらも、議会政治を中心とする慣習や制度や、またロシアでは考えられなかった世論の影響力によって保たれている市民的自由には充分の敬意を表している。この伝統的な自由のもとにゲルツェンははじめて彼の政治的活動の自由を保証された。彼はそのような体験を通じて次第に社会的変革のために国家や議会などの果す役割について認識を深めていったと考えられる。1869年に旧友バクーニンに宛てた決別状ともいべき手紙の冒頭に彼がジェレミー・ベンタムの言葉をかかげつつバクーニンの無政府主義的暴力革命論を批判したのはその一つの帰結であったといえる¹⁾。

近年、パートリッジ教授の精力的な研究でゲルツェンとイギリス社会とのかかわりあいについて従来考えられてきた以上に深いものがあったことが明らかにされた。しかし、かつてカー教授が指摘したように、ゲルツェンはその滞在期間の長かった割には、イギリスの政治生活には積極的に関与することはなかったことも確かである。ゲルツェンが彼の『過去と思索』のなかにとくにとりあげたイギリス人がトマス・カーライルとロバート・オウエンの二人であったことは象徴的である。いうまでもなくこの二人はともに当時のイギリスの支配的政治思想への反逆者たちであった。

ゲルツェンがイギリスの政治生活への積極的なかかわりを持たなかった理由の一つは彼が英語による自己表現になじめなかったことであろう。語学力に関してはすぐれた才能をもっていたゲルツェンも他の同時代のロシア人と同様、フランス語やドイツ語にくらべて英語は不得手で、在英中も結局はその読書力にふさわしい会話力はもつていなかった²⁾。もう一つの理由はロンドンに滞在した当初からゲルツェンの関心はヨーロッパの問題よりもロシアの問題に傾むき、『自由ロシア出版所』を中心とする活動に忙殺されるようになったからである。

にもかかわらず、ゲルツェンがこのロンドンでの亡命生活を通じて、カーライル、オウエン、J. コウエン、W. リントンやチャーチズム運動の指導者アーネスト・ジョーンズなどとの接触をもったこと、またイギリスでの出版物を通じてロシアの政治・社会問題についての紹介を試みたことなどは彼がプーシキンやベリンスキーについてのイギリスへの最初の紹介者であったことなどとともに特記さるべきことであろう。ロシアとイギリスとの文化交流の歴史のうえでゲルツェンは新らしい時期をひらいた人物として忘れることができない存在であると私は考えている。

12年余の間、ゲルツェンはほとんどロンドンに住んでいたが、前後15回も転居を重ねている。おそらくそれは彼の性癖のようにになっていた移転好きのためでもあろうが、やはり亡命者としての外的な必要によることも多かったと思われる。彼の動静については、ロンドンにおいてもロシアの大使館員や後にはロシア政府の特派した第三部のスパイがうるさくうかがっていた。また、客好きでふるまいのよいゲルツェンの家にはロシア人のみならず各国の政治亡命者たちが集って、夜おそくまで飲みかつ語って、静寂を好む近隣のイギリス人住民たちの苦情の種となったようである。常々ゲルツェン自身はこのとりすました国の人々の冷やかさになじめないものを感じていたから、住所を変えることは一つの気晴しになったのかもしれない。

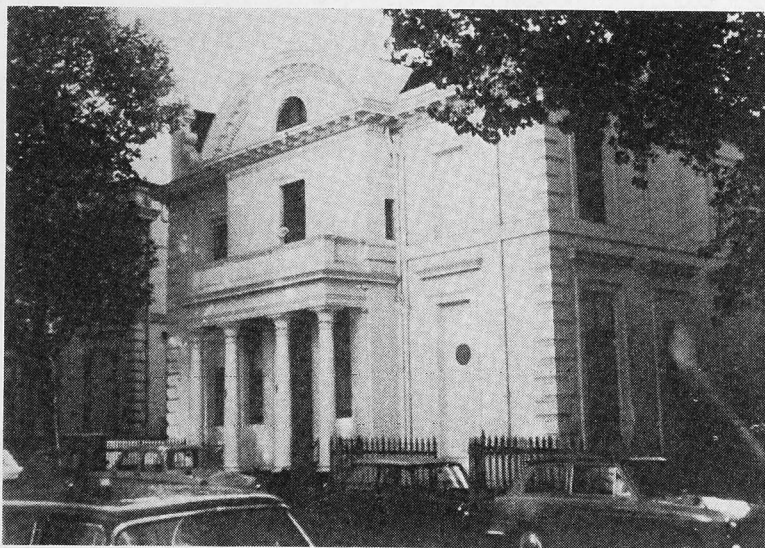
とにかく、彼の度び重なる引越しはそれ自体が一つの研究テーマになるかと思われるほどである。私自身かってレムケ版のゲルツェン全集の付録の年譜から彼の住所をリスト・アップしてそのすべてを訪れてみようと考えたがあまりに多いので計画を放棄したこともあったくらいである。ゲルツェンとオガリョーフの伝記を書いたカー教授はさすがに、その著書の終りに付録として、ゲルツェンの1852年から1865年までのロンドンでのアドレスの一覧表をかかげている³⁹。歴史的事件を理解するに当って、その事件の発生した状況を地理的なものを含めて知っておくことが必要なことは言うまでもない。しかし、どうしたことか、このカー教授のせっかくの付録は邦訳には無用のものとして省略されてしまっている⁴⁰。

私はロンドンを訪れる時は行き先の住所とゲルツェンの旧居との結びつきに気付くことがあった。しかし、彼の住んだ家についてとくにそれを見に出かけられたのは帰国も迫ってからであり、そのために選んだのは彼がもっとも長く住んだウエストボーン・テラスのオーセット・ハウスであった。

このオーセット・ハウスを選んだ大きな理由は私がゲルツェンに関心をもっていることを知ってスラヴ文献学のシモンズ氏がわざわざ送ってきた *The Times* (London)

の1970年9月24日付の記事の切抜きからであった。その切抜きには“BEHIND THE BLUE PLAQUE”と題する論説と“London salute to Herzen, a great son of Russia”という記事がふくまれていた。

それらはいずれも、前日すなわち9月23日にロンドンのシティー・カウンシルがオーセット・テラス1番にあるゲルツェンの旧住居に歴史的記念建造物であることを示す青い金属板をかかげることになり、ソ連大使も出席して除幕したことを報じたものであった。それぞれ短い記事ではあるが、このオーセットの家がかってゲルツェンが1860年から1863年まで住み、その代表作『過去と思索』の大半をここで執筆したことや、ここには当時のロシアの作家たち——ツルゲーネフ、トルストイ、ドストエフスキー——やアナキストのバクーニンが訪れたことなどを解説している。この家をロンドンの歴史的建造物として指定するための運動を推進したのはほかならぬこのザ・タイムズであった。例の論説にはそのことにふれているが、記事の方でも出席したソ連大使がロンドン・シティー・カウンシルとザ・タイムズの代表に礼を述べていることからそのことはあきらかである。しかも、この式典にかってザ・タイムズの論説委員であったカー教授が出席しているところを見ると、この指定のそもそもの提唱者は同教授ではなかったかと考えられるのである。



(No. 6) 1859～1863年までゲルツェンが住んだオーセット・ハウスの現況。
玄関右側の壁に見える円形のものがロンドン・シティー・カウンシルのかかげた記念板。1970年9月筆者撮影
Orsett House, London 1970.

この記事を受けると私は間もなくロンドンに出かけゲルツェン、オガリョーフにゆかりの深いその建物を見ることにした。アドレスと地図を頼りによろやくたずね当てたオーセツ・ハウスはいかにもゲルツェン好みのしょうやかな白亜の家であった。

それはパディンガタン駅で下車して駅の東側のホテルの並ぶウェストボーン・テラスの街路樹の道をビショップス・ブリッジ・ロードに向けて抜けて鉄道線路に出る前に左折したところにあるオーセツ・テラスの一角である。まわりには主としてクレセント風住宅や教会が並びゲルツェンの時代の面影をとどめているように思われた。そのなかでクラシック風のオーセツ・ハウスは道に面して独立して建てられており、その白亜の姿は、くすんだ色のまわりの風景の中でひととき目立つものがある。列柱式の正面玄関や建物をかこむ鉄さくなどをふくめて、もし、これがロシアの白樺林の中に移されたら、そのまま中流地主の館に見えるであろうような、そんな外観の建物なのである。私はゲルツェンがロンドンの亡命生活のなかで比較的長くこの建物に居ついていた一つの理由がそこにあるような気もしたのである。現在ではイギリスの退役軍人の持家となっているこの館の玄関わきの壁には新聞記事でとりあげていた青色の円形の記念板がかかげられていて、その表面には“ALEXANDER HERZEN, 1812~1870, RUSSIAN POLITICAL THINKER lived here 1860~1863” という文字と London Council の印が刻まれていた。

次にこのオーセツ・ハウスについてのゲルツェン自身の記録をたどってみよう。

彼の書簡のなかではすでに1860年10月28日付の家族あてのものにこの家についての報告が見られる。当時彼の家族は保養地のボーンマスに滞在中でロンドンでの住居の決まるのを待っていたのである。ゲルツェンの手紙の一部を引用しよう。

「…………われわれは家を見つけました。——すばらしいよ。だがそのかわりきっちりだ。でも便利だよ。パディンガタン・イーストボーン・テラス・オーセツ・ハウスだ。もし差しつかえなければ15日には引越だ⁵⁹。」

同じ11月14日（旧暦11月2日）付の息子サーシャ宛の手紙には近づく引越しについて次のように報じている。

「愛するサーシャ、

明日、子供たちはパディンガタン、ウェストボーン・テラスのオーセツ・ハウスに移るでしょう。われわれはなお5日間ここに残ります。あちらに宛てて手紙を出すことができます。家は大きくありませんが、しかし、大変よい。オガリョーフは下の一階（au rez-de-chaussée）で寝室と書斎をもちます。私には客間

——大きい——と並んで書齋と階上には三つのサロン、それにイギリス人がアティックと呼んでいる屋根裏部屋一つはよいが三つは荒れている——があります。もし万事うまくゆきナターリヤが来れば、私は屋根裏部屋に移るし、彼女はタータとミス・リーヴェのそばの部屋をもつでしょう。……⁶⁷⁾

この家にはロンドン・ザ・タイムスの記事にも書かれていたようにゲルツェンとの親交のあったツルゲーネフをはじめとしてドストエフスキー、トルストイなどの有名作家をふくめたロシア人の来客が少なかった。この家に或る日すでにシベリアの流刑地で死んだと思われていたバクーニンが脱出に成功して日本—アメリカを経て10年目に舞いもどってきた時には館中が興奮に包まれたものであった。ロシア人以外にもフランスやイタリアの亡命政治家たちの来訪も少なくなかった。当時のゲルツェンの手紙の中に記録されている来訪者にはルイ・ブランの名前も見える(1861年4月12日)⁷⁰⁾。

この家に住んだ1860年から1863年の間はゲルツェンにとってもその『自由ロシア出版所』にとってもそのもっとも活発な活動期であった。ゲルツェンはすでにその回想記『過去と思索』を発表しつつあった。オガリョーフもまたゲルツェンのよき協力者としてその機関誌『北極星』と『鐘』ボリヤールナヤ・ズヴェズダ コーロコルのための編集や執筆に取り組んでいた。

とりわけこの館がわき立ったのは1861年3月に待望の農奴解放の勅令の発布の報がその主人たちにとどいた時であった。彼らにとっての長く苦しかった亡命生活とたたかいがまさにむくわれたと思われたことであろう。解放の勅令のテキストが手に入る前からゲルツェンはこの歴史的な日を祝う祝賀会を4月の5日にオーセツ・ハウスで催す計画をすすめた。ゲルツェンのアイディアでこの日の祝宴にはロンドン在住のロシア人たちと内外の名士たちが招待されることになっていた。館の上には“EMANCIPATION in Russia, 3 March 1861”と形どったガス・イルミネーションがかかげられ、建物は三方から照し出され、街頭にまでイルミネーションが飾られることになった。当日の会場ではブラスバンドが“マルセイエーズ”やゴリーツィンの編曲した“ヴォルガ下り”“まだポーランドは消えなかった”、マズルカ、“ウィリアム・テル”などの曲を演奏することに予定されていた⁸¹⁾。

参列者たちはこの祝宴で館の主人公たちの生涯をかけたロシア農民解放の事業の成功を祝う予定であった。しかし、祝賀式の直前になってロシアの軍隊がポーランドで叛徒にたいする発砲を開始した事件が伝えられ、皇帝の解放令のもつ本質と限界がたちまち明らかになった。祝賀の宴のプログラムは手直しされ、この集会はゲルツェン

とオガリョーフにとって新たな、しかも苦難にみちたたかいのはじまりとなった。

〔III. 注〕

- 1) ゲルツェンが引用したペンタムの言葉はペンタムが1816年にロシア法典編纂の計画についてアレクサンドル一世に宛てた手紙のなかからのもので「動機というものは、それがいかに充分なものであろうとも、充分な手段がなくては、それだけで現実的なものたることはできない。」という趣旨のもの。
- 2) イギリスでゲルツェンが出席した1853年のポーランド反乱23周年記念の集会や1854年2月のチャーチストの集会の席上での彼の演説はいずれもフランス語で行われた。出席しているイギリスの大衆にはその内容は理解できないことが多かったといわれる。しかし、ゲルツェンが英語の読解力をもっていたことは確かなことである。彼は当時ロンドンの『ザ・タイムズ』の読者であった。
- 3) カー教授が作成したゲルツェンのロンドンにおける住所リストを再録すると次のとおりである。

1852年8月25日—1852年9月20日(?)	トラファルガー・スクウェア、モーリイズ・ホテル
1852年9月20日(?)—1853年10月31日	スプリング・ガーデンズ、4番
1853年10月31日—1854年6月(?)	ユースタン・スクウェア、25番
1854年6月(?)—1854年12月26日	リッチモンド、セント・ヘレン・テラス
1854年12月26日—1855年4月5日	トウィックナム、リッチモンド・ハウス
1855年4月5日—1855年12月5日	リッチモンド、チャムリィ・ロッジ
1855年12月5日—1856年9月10日	フィンチリィ・ロード、ピーターバラー・ヴィラズ 1番
1856年9月10日—1858年11月11日	パトニィ、ハイ・ストリート、ロラル・ハウス (テ ィンクラー氏宅)
1858年11月24日—1860年5月25日(?)	フラム、パーシィ・クロス、パーク・ハウス
1860年5月25日(?)—1860年11月15日	リージャンツ・パーク、アルファ・ロード、10番
1860年11月15日—1863年6月28日	ウェストボーン・テラス、オーセット・ハウス
1863年6月28日—1864年6月(?)*	テティングタン、エルムズフィールド・ハウス
1864年9月(?)—1864年11月10日	メイダ・ヒル、ウォリック・ロード、タンズトール・ ハウス
1864年11月10日—1864年11月†	パディングタン、イーストボーン・テラス、11番
1865年2月22日—1865年3月15日	リッチモンド、ロスシィ・ヴィラズ

(原注)

* 1864年6月から9月の間、ゲルツェン、ナターリヤとその子供たちはボーンマスにおり、ロンドンには家を持っていなかった。

† ゲルツェン、ナターリヤとその子供たちは1864年11月21日にパリにむけて発った。ゲルツェンは単身1865年2月22日に戻った。

以上のようなリストに添えてカー教授は次のようなナターリヤ・オガリョーフの回想記からの言葉を引用している。

「ゲルツェンはいつもも言っていた、イギリスの家では部屋の配置や家具の位置についてまでもあまりに画一性をもっているので自分はどの部屋もあるいはどんなかくれた目標でも見

つけられるくらいだと」

- 4) E.H. Carr, *The Romantic Exiles*, A Nineteenth-Century portrait gallery, Penguin Books, p. 328.

E. H. カー著、酒井唯夫訳『浪漫的亡命者』筑摩書房刊、1970、同じ訳著による旧訳（1953）でも同様である。おそらく、この労作が日本ではもっぱら文学作品として扱われる傾向からであろう。訳者が文中でロシアの政治グループ“ゼムリヤ・イ・ヴォーリヤ”を学界での定訳「土地と自由」と訳さず「国土と自由」と訳しているのもそのような事情からであろう。

- 5) А.И. Герцен, Полн. Собр. Соч. Том XXVII, стр. 102. ここでゲルツェンがオーセットの家のアドレスをイーストボーン・テラスとしているのはウエストボーン・テラスの誤り。
6) Там же, стр. 110—111,
7) Там же, стр. 149.
8) Там же, стр. 142, 144..

IV. オガリョーフのグリニッジの旧居とその遺骨 のモスクワへの帰還

ゲルツェンの名と切りはなすことのできない終生の友人であり、同志であったニコライ・オガリョーフの生涯もまたイギリスと不可分にむすびついている。彼はゲルツェンとともに『北極星』や『鐘』の編集に当り、ゲルツェンとともにロンドンでの生活を経験した¹⁾。最後までロシア貴族としての誇りと生活習慣を変えなかったゲルツェンにくらべてオガリョーフははるかにイギリスの庶民生活に近ずけたはずである。ゲルツェンの墓地はフランスのニースにあるが、オガリョーフは彼の人生の最後を過ごしたロンドン市外のグリニッジ（Greenwich）に葬られた。

カー教授は前章でも引用したゲルツェン、オガリョーフの伝記的作品のなかで、このオガリョーフの物語りとしてと“Poor Nick”題する二章を捧げている。教授の関心はこの薄幸な亡命ロシア人を革命的思想家として評価したり、煽動的な詩人としてとりあげることよりも、複雑な愛情の三角関係のもつれのなかで悩み抜き、自ら所領の農奴を解放した上ですべての財産を失い、最後にはロンドンの街角で知り合った一娼婦に情熱を傾け、その更生に余力を注いだお人よしで多感な夢想家として描くことにあったようである。それだけにその作品のなかでのオガリョーフの最後の日々の物語りは読者の人間的な感動をさそう。カー教授が“Poor Nick II”と題したオガリョーフの晩年に関する章の最後の舞台となったグリニッジの旧居を自ら訪れてみることは在英中の私の一つのねがいであった。

ロンドンの旧市内からグリーニッジにいたる電車は市内をはなれて東に下るにつれて車内の乗客も窓外の風景もいかにも労働者街に来了感を与える。ここにはロンドンのもう一つの顔がある。ニュー・クロスの駅で下車し、バスでグリーニッジ・ハイ・ロードに出るとオガリョーフの旧居のあるアシュバーナム・プレイス (Ashburnham Place) はほど近い裏通りにある。ここまできると駅前通りの活気もなく、ごくありふれた煉瓦造りの三階建ての古風な長屋式の住宅が並び忘れられたような静かさである。しかし、かつてゲルツェンがオガリョーフとともに住んだオーセット・ハウスやその附近のしょうしゃな雰囲気はここにはない。たまたま通りに出ていたパキスタン系の労働者らしい住民にオガリョーフの旧居について聞いてみたが、彼にはその名すら初耳であった。私はひかえてきた旧居のアドレスを頼りについにその場所を探し当て、おそらくオガリョーフの時代にくらべていくぶん改造されたであろうその古風な建物を眺め、カメラに記録した。(写真 No. 7)



(No. 7) オガリョーフが晩年を過した Greenwich, Ashburnham Place の住宅街。1970. 筆者撮影

オガリョーフはその生涯の最後の三年間 (1874~1877年) をここで過した。すでに、1863年のポーランドでの反乱に当って、ポーランドの民族独立運動に組したゲルツェン、オガリョーフはロシアの世論のナショナリズムの高揚のなかで急速にその影響力を弱めていたが、1870年にゲルツェンが死ぬと、残されたオガリョーフはいっそう孤独な境地に陥らざるを得なかった。この頃になると彼は過度の飲酒によるアルコール

中毒症状と持病のてんかん症状もあって、外出には杖に頼らねばならなかったし、ほとんど一日中部屋にこもって過したという。カー教授はオガリョーフが晩年ここに移り住んだのは彼のひたむきな愛情で更生したメアリー・サザランドがこの地に家庭生活を選んだからであり、それはおそらく彼女の出生地であったろうと推測する。

オガリョーフの最後の物語りはいたましく、もの悲しい。彼は日常この母子とはほとんど英語で話すようになっていたが、その臨終に当って半ば意識を失ってうわごとのように母国の言葉で亡き友ゲルツェンに語りかけたという²⁾。時に1877年5月31日（新暦6月12日）であった。その遺骸は住居から遠くないグリーニッチの共同墓地の一角に埋葬された。

私はグリーニッチのオガリョーフの墓地を訪れる時間的ゆとりをもたなかった。しかし、敢えてそこまで来て墓地を訪れなかった理由は他にもあった。実は私はすでに1966年9月18日にモスクワの市内にある有名なノヴォデューヴィチー墓地を訪れた時



(No. 8) モスクワ、ノヴォデューヴィチー墓地のオガリョーフの墓

The new tomb of N. Ogarev in Moscow, 1966.

に、そこでゴーゴリをはじめ他の有名なロシアの作家たちの墓標をたずね、その一隅にあるオガリョーフの墓に詣でたことがあったのである。それは草花でおおわれた土盛りの上にオガリョーフの肖像写真を立てた素朴なものであった。(写真 No. 8)

1966年当時、私にはオガリョーフの墓地がグリーニッチからモスクワに移ったのが、いつのことで、いかなる事情であったのかわからなかった。この疑問を解いてくれたのは、ゲルツェン研究で知られるノッティンガム大学のパートリッジ教授である。同教授を訪れて一週間ノッティンガム大学に滞在している間に私は他の話とともに、このオガリョーフの墓地についての

話を聞いた。

オガリョーフの遺体は実は私がモスクワのノヴォデューヴィチーを訪れるわずか半年程前の1966年2月24日夜にグリニツの旧墓地から、ソ連から派遣された人々によって掘り起され、一旦荼毘に付された後に特別に差し向けられた飛行機によってモスクワに運ばれ、同3月2日故国の地に埋葬されたのであった。パートリッジ教授は遺体の発掘された翌25日ソビエト大使館でひらかれたレセプションに招かれ、ソ連から派遣されてきたモスクワ大学教授代表、ソビエト作家同盟代表たちの前でイギリス人来賓を代表して演説した当人であった。彼女は当時ソビエトのカメラマンによって撮影されたグリニツの墓地の発掘作業、火葬の状況、レセプションの会場などの写真を示しながら説明してくれた。

オガリョーフの遺体はこのように1966年2月末日でグリニツからは持ち出され故国に帰ったが、その後もグリニツの墓石はもとの姿でそこに保存されているとのことであった。同教授がしきりに残念がっていたことは、イギリスの法律では一旦埋葬された死者の遺体を国外にもち出すに当っては厳しい免疫処理が要求され、手続も複雑で日数もかかるのでソ連の代表たちはモスクワでの式典の日程にあわせるために棺を開けることなしに火葬に付することに決めたのだという。そのため棺の中に収められていたと考えられる副葬品——同教授はオガリョーフの遺品、手紙などがあったと推測する——は遺体とともに灰となってしまったという。いかにも学究らしい同教授の嘆きに私も大いに同情したものであった。

同教授はこのオガリョーフの故国への帰還のいきさつについてはソ連側の記事としてはモスクワ大学通報の1966年第二号(Вестник Московского университета, No. 2-1966)にそのための特集が組まれていることも教えてくれた。オクスフォードのボードリアン・ライブラリーで私はその記事を見ることができた。それはかつて故国に容れられなかった薄幸な革命家、愛国者の故国への晴れがましいがいせんともいふべき盛大で熱烈な行事であった。以下はその記事による当時の状況である。

1966年3月1日18時にモスクワのシェレメチェフ飛行場にオガリョーフの遺骨の骨壺を積んだ特別機が到着した時には飛行場にはすでに彼の母校モスクワ大学の学者たちや、作家たち、ジャーナリスト、カメラマン、テレビ放送記者などのグループが大勢集ってこれを迎え、1856年に亡命以来110年を経て故国にもどったこの革命家の遺骨に脱帽し、黙禱を捧げたという。その後、骨壺は霊柩車にのせられモスクワ大学にむかい、さらに同校の学生たちが多数待ちうけているゲルツェン通りの文化の家に運

ばれた。ここでは楽隊がベートーヴェンの曲を演奏して遺骨を迎えた。この会場ではグリニッチへ引取りに派遣された代表者の一人エス・アー・マカーシン教授の報告はじめ、モスクワ大学のエヌ・イー・モクォーフ教授らの記念講演やオガリョーフの詩の朗読が行われた。翌3月2日には11時からゲルツェン・オガリョーフの記念像のあるモスクワ大学の旧館においてみぞれ降る悪天候にもかかわらず満員の聴衆を集めて記念集会がもたれた。この集会ではオガリョーフの革命家として、また詩人として、さらにすぐれた編集者・執筆者として専制政治と農奴制とたたかったその功績をたたえ、彼をロシアの愛国者、すぐれた社会主義者として讃える演説が相次いだ。この集会の後にオガリョーフの遺骨をロシアの大地に引渡すためにノヴォデューヴィチー墓地にむけて会場から長い葬列が繰り出され、その行列はマルクス通り、ゴーリキー街、オガリョーフ街、ゲルツェン街を経てオガリョーフのかつて住んだ町を通り、クロボトキン街を通して埋葬地点に到達した。このノヴォデューヴィチー墓地には寒天をついて数百人の人々が集って故人への最後のつとめを果たしたという。それらの人々のなかには著名な教授たちや作家たちとともにゲルツェンの曾孫アー・イー・ゲルツェナとエヌ・ペー・ゲルツェンの顔もあった。埋葬が終ると楽隊がソビエト国歌を演奏した。墓の上にはモスクワ大学、ソビエト作家同盟、モスクワの作家たち、その他各種の組織からの花輪が捧げられた。そして、墓の上にはオガリョーフの肖像と金文字で「すぐれたロシアの革命的民主主義者、詩人ニコライ・プラトノーヴィチ・オガリョーフ、1813～1877」と記された大理石の板が置かれた³⁾。

私がモスクワを訪れた時に詣でたのはほかならぬこの新しいオガリョーフの墓であった⁴⁾。

[IV. 注]

- 1) オガリョーフがロンドンのゲルツェンと合流して1858年～59年の間につくった「余計者の告白」と題する詩には二人の若い時期の誓いについての思い出が語られている。

「私はおぼえている5アルシンの小部屋／ベッドや椅子やローソクのともった机／そして、そこで三人*、われらデカブリストの子／また新しい世界の生徒たち／フーリエとサン・シモンの弟子たち／われらは誓った、すべての生活を／人民とその解放に捧げよう／社会主義の基礎をおこうと。」

* 三人とは、ここではゲルツェン、オガリョーフとワジム・パセックのこと。

- 2) E.H. Carr, *The Romantic Exiles*, p. 304. 邦訳 330～331。
- 3) このモスクワへの帰還にいたる経過については主として、『モスクワ大学通報』1966年No. 2に載った諸記事に依った。しかし、どうしたことが、そこにはオガリョーフの最後の妻メアリーの名は黙殺されている。彼女がかつて娼婦であったからであろうか。ゲルツェンも彼の家庭の集りにメアリー母子を決して招かなかったそうである。なお、ノヴォデューヴィチのオガリョーフの墓の写真(No. 8)は、当時いっしょに墓地を訪れた金田日出雄氏から贈ら

れたものである。記して感謝に代えたい。

- 4) イギリスにおいてオガリョーフに関する独立した研究論文やモノグラフィーは私の目にはふれなかった。

ソビエトの学界ではオガリョーフの著作集二巻が戦後間もなく出版され(1952年、1956年)、彼についての研究書や啓蒙書、論文などもかなり出版されている。

М.В. Яковлев, *Мировоззрение Н.П. Огарева*, АН СССР, Москва, 1957.

(エム・ヴェー・ヤコヴレーフ、『エヌ・ペー・オガリョーフの世界観』、科学アカデミー出版、モスクワ、1957)

В.А. Путинцев, *Н.П. Огарев, Жизнь, Мировоззрение, творчество*, АН СССР, Москва, 1963.

(ヴェー・アー・プチンツェフ、『エヌ・ペー・オガリョーフ、生涯、世界観、著作』—生誕 150 周年記念—、科学アカデミー出版、モスクワ、1963年。

Е.Л. Рудницкая, *Н.П. Огарев в русском революционном движении*, Наука, Москва, 1969.

(イエー・エリ・ルドニツカヤ、『ロシアの革命運動におけるエヌ・ペー・オガリョーフ』、《ナウカ》出版、モスクワ、1969

などは、そのうちの代表的なもので、革命的民主々義者としてのオガリョーフの世界観と政治活動の再評価をめざしている。

あ と が き

この報告の本文のなかでも記したようにゲルツェンとオガリョーフのイギリス滞在とその活動はひろくは国際労働運動史や英露交渉史において、また狭くはロシアの解放運動史のなかでの注目すべき事件であった。

この時期の両者についての研究としてはすでに E. H. カー教授による戦前の労作があり、近年においては M. パートリッジ教授による諸論文がある。ソ連における研究にもこの時期をめぐるものは少くない。私のこの報告はそれらの先学の業績に導かれながら、自らの目でその事跡を確め、イギリスの研究者たちに接してその教示を得ようと試みた記録である。

それらは私のこの問題についての研究のための基礎作業ともいうべきものであるが、ここでとりあげた諸事項については、日本での報告はまだほとんどないので、この報告もそれなりのささやかな存在意義をもち得るのではないかと考えている。

1972年10月31日

(いまいよしを 本学助教授・経済・社会思想史担当)